

ベルリン封鎖前後日誌

清水良三

目次

- (一) はじめに
- (二) 本論——一九四八年六月十八日～六月廿七日——

(一) はじめに

国際政治学は国際社会学と混同されがちである。国際社会学が国際社会における国家の行動を観察して其処に或る規則的な行動様式を発見しようとするのに対して国際政治学は国際社会を構成する国家がどのように行動すれば国際平和の維持と国際社会の繁栄が実現するかを探求しようとするものである。したがって国際政治学にとっては国際社

社会学は補助的・不可欠の学問ではある。それは国際社会学によって獲得される諸国家の行動様式についての観察に基いて前記の目的の実現をはかろうとするからである。平和や繁栄の実現は望ましいにもかかわらずこれを実現することは難事の中の難事である。従来色々な学者が世界平和の実現と繁栄の獲得のための方法を考えて来たが、いずれも社会学的分析の背景に欠けているためにきわめて優秀な少数の大学者を除いて成功したためしは殆んどない。世界にはいぜんとして戦争が繰り返されており繁栄は一部の先進国の中の一部の人たちにとつての現実であるにすぎない。繁栄は貧困の裏側の現象であるから国際政治学は貧困の除去についての方法を探求しなければならない。平和は戦争の裏側の現象であるから国際政治学は戦争をなくすための方法を探求しなければならない。貧困の除去と戦争の追放という課題は国際政治学が当初から背負っている二つの重い十字架である。

戦争とは国家間の暴力による紛争解決方法であるから貧困と比較すると現象的にとらまえてやすい。貧困は地球上のいたるところにみられる現象であり夫々の国家の内部において相対的な現象であるばかりでなく、夫々の国家対国家の関係においても相対的であるために容易には把握しがたく、これを組織的に研究把握しようとするれば対象は無限に多くひろがって行き困難きわまりない作業となる。経済学や国際経済学が探求の道具として必要となつて来るため国際政治学者は、自己のエネルギーの限界を想起してたじろぐ。そして彼らは其の重要性を充分に承知しながら、貧困の研究を一応棚に上げるのである。そして残つた課題に取り組むことになる。それは戦争の除去の問題であり平和の確保の問題である。またそれと関連した南北問題であり、国家統合の問題である。

戦争を此の地球上から除去しようとするばまず戦争の原因を追求しなければならない。戦争の原因を追求しようとするば戦争の歴史を研究しなければならない。戦争の歴史を研究しようとするば外交史を研究しなければならない。

かくて国際政治学の研究者はまず外交史の研究をしなければならぬのである。外交史は大戦争直前の緊張した国際関係を叙述する時もっとも精彩を放つ。それはそれによって多くの人々の幸と不幸が決定される過程であり生死の問題を抱えこんだ重要な時期であるからである。外交史は斯くて国際政治学の研究対象の一つである。しかし外交史そのものは過去の外交関係の諸事実の説明であつて将来の人類のために役立つような事実のみを追求するわけではなく、主として戦争乃至戦争の危機という事実を事実連鎖の結果として把握するのであつて、将来の戦争の防止に役立つような事実ばかりを記述するわけではない。

(二) 本論——一九四八年六月十八日～六月廿七日——

一九四八年六月に西ドイツの通貨改革が発表されると、ベルリンには驚くべき速さで次々と重要な事件が起きて行く時期がはじまつた。ソヴィエトは全ベルリンを東独の通貨改革区域に編入しようとした。だが、西側諸国はこれに先駆けて、一定量の西側通貨を西側の三管区に導入することを決定した。するとソヴィエトはベルリンと西ドイツとの間の陸路を閉鎖し、東管区および東地域から西ベルリンに入っていた電流をとめてしまった。西側諸国は此れに対応して、食糧および燃料を飛行機で一般市民に補給した。ソヴィエト側の抗議ならびに暗黙の脅迫があつたにもかかわらず、引続いて此の補給手段を拡張して行つた。

連合国を徐々にベルリンから追い出そうとするソヴィエトの意図が明らかになるにつれて、ロンドンやワシントン、ベルリンの西側軍政府の統合本部、市公会堂、かつてのドイツの首府であつた此の町のあちらこちらで興奮した議論

が行われた。どの様に対応すべきか。ベルリンへのソヴィエトの圧迫に対する抵抗が成功する機会があるだろうか。空輸によってどれ位まで此の町に運びこめるであろうか。西側諸国は彼らの立場をまもって行くだろうか。それとも彼らは其の損失をここで打切り、撤退するであろうか。諸国民の政策が決定され、数え切れないほどの個人の夫々の行動が決定されたのは、これらの議論によってであった。

地方の状況および国際的状況の発展が複雑に絡み合っているので、それに惑わされないためにも、また、此等の急速だが遙か先までの影響力を持つ諸決定がどのような雰囲気のうちでなされたかを多少なりとも想起するためには、日起きた出来事を別々に考察するのが適当である。そういう訳で、これからのページは六月一八日から六月廿七日までのベルリン危機の日々の記述である。^{*}

* 此の期間の情報が多くは、個人的な回想やどちらかという一般的な想定の形で残されているものが多いので、所与の事件が起った正確な日を決定することが出来ないことが時々ある。生起した時期を二、三日の範囲内にせばめ得る場合には、其の事件は最も妥当であると思われる日に起ったものとしておいた。時間を決定することが更に困難であることが分った諸事件については本論文の続篇に概括して述べる積りである。

六月十八日—六月廿七日

（日々の説明）

六月十八日（金曜日）西独の通貨改革

西ドイツ銀行が週末のため閉店した直後、アメリカ、イギリス、フランスの三つの占領地帯に適用される第一回通

貨改革法案が新聞紙に発表された。同時に此の法律が西ドイツにおいて有効になるのは六月二十日からであるが、ベルリンには適用されない旨が発表された。ベルリン人への激励の声明文において、ハウリー大佐は、ベルリンにおいては従来の通貨が其の儘有効であること、西側からの補給品の分配は其の儘つづけられるという事を指摘した。また、ハウリー大佐は、ソヴィエトがベルリンの通貨に関して何か一方的な措置をとることのないよう警告する積りからであったろうが、ベルリンはいぜんとして四国の管理下にあり、いずれか一国の管区において発表された規則には従わない①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

西独における通貨改革の計画が公表される数時間前に、西側の各軍政官たちはソヴィエト軍政官に來たるべき変化について報告し、ベルリンの通貨改革について、彼と討議する意志がある旨を表明した。②

此の声明に対するソヴィエトの即時の反応は、東ドイツを価値の低い貨幣の氾濫から擁護するためという表面上の理由から、交通制限をさらに新しく課したことであった。ソヴィエト地域への客車の出入は差止められた。西側からのすべての乗物は此の地域へ入ることを禁止された。西独で発行された通過証によってするソヴィエト地域への徒歩交通さえも差止められることになった。鉄道並びに運河による西独からベルリンへの貨物輸送は其の儘継続出来た。だが、それとても、乗組員や警備員の身の廻品をも含めて、貨物の嚴重な検査をした後においてのみであった。③

六月十九日（土曜日）——ソヴィエト全ベルリンを要求——

西独の通貨改革が発表されるや、翌日、すぐ共產主義新聞に猛烈な非難文が掲載された。また、ソヴィエト軍政官、ソコロフスキー元帥のドイツ人民に宛てた声明書が発表された。此の声明はベルリンがソヴィエト管区の一部である

と述べていたために、多くの場所で特に不安な状勢をつくり出した。「西側諸国のドイツ占領地域で発行された銀行券は、ソヴィエト占領地域の一部であるドイツおよびベルリンにおけるソヴィエトの占領地域で使用することを許されていない」。さらに、ソコロフスキーは、ソヴィエト軍政府は全ドイツのための通貨改革が必要であり且つ可能であると考えていると述べた。^④

ベルリンはソヴィエト地域の一部であると考えられるべきだというソヴィエトの主張は、西側諸国、市政府、街上の人の怒りを買ひ、また心配をつくり出した。新聞紙上の声明で、クレイ將軍はソコロフスキーの見解を排撃し、ベルリンは国際都市であるという事を強調した。彼はまた、新しいソヴィエトの交通制限に対応するための方法について、英国やフランスの同僚と相談する旨語った。^⑤

ベルリンにいたアメリカの新聞記者は、心配したドイツ人たちが街上でアメリカ官憲を呼び止め、ソコロフスキー元帥が其の声明の中で、ベルリンをソヴィエト地域と結びつけたことは正しいのかどうか尋ねていたという事を報道している。^⑥

六月十九日の夕方に市議会が開かれた。議会は市長代理ルーズ・シュレーダーの一言一言注意深く述べられている声明書を聴聞した。其の声明は四国が全ドイツの通貨改革について意見が一致しなかったことに遺憾の意を表明したが、一般市民に対しては市政府の機能が続行される旨を述べて安心させた。シュレーダー夫人もまた、ベルリンの四国管理的な性格を其の儘維持してくれるよう占領国に直接訴えた。彼女の声明は民主主義派の多数の賛成を受けた。^⑦

一方、社会主義統一党（SED）はこれに烈しく反対し、西側の通貨改革は完全にドイツを分裂せしめたから、市政府当局（マギストラート）は、いまや「政治的結論を引出す」べきであり、ベルリンを東地域の経済に出来るだけ密

接に結び付けるための手段を講ずべきであるとした。其の日も未だ遅くならないうちに、共產主義者である一政府当局者は彼の仲間にも次のようなことを語った。「ソヴィエトはベルリンを其の保護下におさめた。四国の施政は崩壊したのである」。

西ドイツの通貨改革についての報道およびソコロフスキー元帥の声明によって、市議会の議論は触発されたけれども、東ドイツの通貨改革もまたそう遠くはないということが一般に知られていた。本当に此の十九日に東ドイツ中央財務省の長官は、ここ数日中にソヴィエト地域に通貨改革が行われるであろうと述べたのである。^⑧

六月廿日（日曜日）——ソヴィエト側非公式に交渉開始を求む——

ソヴィエトが出版している「毎日評論」『Tägliche Rundschau』は、東西間の難題は四国間交渉によって解決出来るということを示唆した。西側社会の人々の中には、此の暗示はソヴィエトが連合国管理理事会を再建しようとしていることを意味するものと解釈する人がいた。クレイ將軍への手紙でソコロフスキー元帥は、西独における通貨改革の開始に抗議した。そして再び大ベルリンはソヴィエト地域経済の一部であると考えざるを旨声明した。^⑨

六月廿一日（月曜日）——東独における通貨改革発表さる——

ソコロフスキー元帥の手紙に答えてクレイ將軍は、四国全部を満足させるような解決方法を発展させるべく、ベルリンの通貨事情について四者で討論することを提案した。^⑩

新聞に発表した声明の中で彼は、陸上からベルリンに出入することがかりに出来なくてもアメリカ軍はベルリンに

止まるであろうということ、および、ベルリンにいる一万人のアメリカ人に空から補給することは、期間に制限がなくとも可能であるという事を附け加えた。^⑪

一方、ソヴィエトの指導する通貨改革の準備は急速にすすめられて行った。ソヴィエト地域におけるドイツ経済委員会の委員長・ハインリッヒ・ラウは、ソコロフスキー元帥に東独およびベルリンにおける通貨改革計画を提出したということ、並びに彼はそれが元帥によって承認されることを確信している旨述べた。此の計画によると、社会主義統一党（SED）、ソヴィエトの管理する諸企業、一般に共産主義者が支配する団体、これらの個々の機関の官吏や職員は、旧マルクを一对一の割合で新マルクと交換出来ることになった。一般の公衆はもっと遙かに不利な割合で、新マルクを受取ることになっていた。そして私企業は、其の場の費用に合うだけの貨幣を与えられるに過ぎなかった。「不当利得者」や「ファシスト」、或いは闇市活動をした人、またはナチスのために戦時物資を生産した人は、全然交換出来ないことになっていた。実際においては此の事は、共産主義者が承認しない者は誰でも貨幣を所持することが出来なくなることを意味したのである。^⑫

六月廿二日（火曜日）——ソヴィエト地域の改革に全ベルリンが含まれるということ——

火曜日の夕方に四占領国の各々の財政専門家がベルリンの貨幣状況を討議するために集まった。それから数日後発表されたフランスの公式声明によると、フランス代表はソヴィエトの管理する貨幣が全ベルリンの法定貨幣たるべきだということ、米英の同僚に勧めた。だが、ソヴィエトの代表は必要な規則を四国協賛のもとに発令することに反対した。彼は「ロシアの立法はベルリンの全管区に適用されなければならない」から、命令を発するのはソヴィエト

だけであると主張した。¹³⁾

米英の此の会合についての説明もまた、此の会談を失敗に帰せしめる原因となったのは、ベルリンにおける四国管理の原則をソヴィエトが拒否したことである旨を強調したのである。¹⁴⁾

此の会合が散会になる直前、午後十時頃、ロシアの伝令が到着した。彼がソヴィエトの代表に東独およびベルリンにおける通貨改革の準備が完了した旨をささやくのを連合国側の通訳の一人が聞いた。^{*}

^{*} 参加者の一人が語る所によれば、此の会合が行われたのは六月廿三日であった。(Cf. Jack Bennett, "The German Currency Reform," *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, January, 1950)

此の事は、ソヴィエトが通貨問題の討議に参加した主要な理由は、彼ら自身の通貨改革を準備するのに必要な時をかせぐことにあったのではないかという疑念を起させた。¹⁵⁾

通貨問題の専門家たちが未だ会合を続けていた午後九時に、市長代理ルーズ・シュレーダーはソヴィエトの連絡将校・オチュキン少佐 Major Orschkin から市公会堂に呼び出された。彼女に随行した副市長フリーデンスブルグは其の日記にオチュキンは「或る種の威厳をつくらって」彼らに三つの文書を渡したと書いている。それは、ルクヤンチエンコ・ソヴィエト軍司令官 Soviet Chief of Staff General Lukjanshenko 自筆の覚書、六月廿三日附のソコロフスキー元帥命令百拾老号および補助規則をも含めての六月廿一日附東ドイツ経済委員会命令の三つであった。¹⁶⁾

ソヴィエト軍司令官の覚書は、此等の文書はベルリンにおける通貨改革の準備措置を講ずるものであると説明し、さらに次の如く附言した。「ソヴィエト軍政部はベルリン市参議会が通貨改革開始についての軍政部の指示を実行することを疑わなご」。¹⁷⁾

文書を一瞥した後、フリーデンスブルグ博士はオチュキン Otschkin に対して、命令百拾号はベルリンの非ソヴェト地区にも適用されるのかどうか尋ねた。少佐は適用されると答えた。「それから私は、此の見解はベルリンの暫定憲法とどのように調整されるかについて尋ねた。オチュキン少佐 Major Otschkin は其の点については何も言明することは出来ない」と答えた。最後に私は、他国が特別に其の管轄地区について別の協定を締結した場合、市政府執行部（マギストラート）はどうすべきかを尋ねた。オチュキン少佐は此の質問に答えることを避け、西側諸国が何か矛盾するような規則をつくることは考えない」と答えた。¹⁸⁾

西側諸国や市政府の高級官吏たちが、其の晩枕を高くして眠れたかどうか疑問である。西側は其の立場に重大な亀裂を生ぜざるを得なくなった。アメリカおよびイギリスの当局者が考えたソヴェトの動きに対する唯一の方法は、西側の貨幣を彼ら自身の管区に導入することであった。だが、フランスは最初これに同意しようとはしなかった。執念にとりつかれたような交渉がそれに続き、遂にフランスは其の反対を撤回した。だがそれとて、フランスは西側の貨幣をベルリンに導入することを決定したことに¹⁹⁾ついて責任を分担する意志はないということを、書簡で他の西側諸国に¹⁹⁾通達した後においてであった。

六月廿三日（水曜日）——相反する通貨改革と市公会堂の暴動——

水曜日の朝にベルリン人たちが眼覚めた時、彼らは二つの相反する通貨改革の報道があるのを知った。ソヴェトの管理する通貨は全ベルリンに通用されるべきものであるというソコロフスキー元帥の命令に対して、西側軍政府はドイツ人の諸機関にソヴェトの命令が適用されるのは東ベルリンのみであるという指示をした。西側の三管区にも

しも西独のマルクが導入されるならば、此等三管区においては西のマルクと東のマルクの両者が法定貨幣となるであらう。ソヴィエトの動きは予想されていた。そして西側通貨を導入するための措置は、水曜日の朝の新聞に発表される準備が出来ていた。^②

ベルリンの民主主義的指導者たちは、直ちに西側諸国の背後に集まった。エルンスト・ロイターは西側のマルク導入を歓迎した。そして此の措置は不穏な状態をつくり出す原因を除去したと述べた。二つの貨幣が相並んでベルリンにおいて通用するであらう。そして市の行政は以前と同じように続くであらう。ベルリンのキリスト教民主連合（CDU）の委員長ランドスベルグ教授は、ベルリンをソヴィエト地域の一部として取扱うべしという市政府執行部（マギストラート）に対するソヴィエトの命令は「不都合なものである」として、公然非難した。自由民主党（LDP）の委員長カール・ヒューバート・シュヴェニツクは、ベルリン人はいずれか一つの地域に結合されるよりも四国統治下に此の儘おかれることを希望する旨強調した。そして其の為の唯一の解決方法は西側マルクの導入であると語った。ベルリンの独立労働諸組合の指導者たちは、ソコロフスキー元帥の行動は危機を呼び起すものであるとして非難したが、二重の貨幣制度が実施されることは可能であると考えた。^②

市政府執行部（マギストラート）が会合を開いた時、民主主義を擁護する多数派は、四国統治を規定しているベルリン憲法は支持されなければならないという其の立場を再び公式に明らかにした。社会主義統一党の一評議員は「ロシア人が欲することは、市政府執行部（マギストラート）がそれを承認しようがしまいが、実行されるであらう。それ故、吾々はソコロフスキー元帥の命令を全市にわたって実行することを決定すべきである」と叫んだそうである。民主主義派の多数は、暗黙の脅迫に疑いもなく気を病んだけれども、確固として其の立場を変えなかった。

午後四時に、市議会の特別会がズール博士 Dr. Suhr によって召集された。だが、市議員たちは、共産主義者の群衆に妨害されて、会合することが殆んど不可能であることを知った。市議会が遂に開会される直前に印刷されたターゲスシュピーゲルの臨時版は、次のような記事を掲載している。

市公会堂前の街路に群衆が集まっている。二時頃建物の中に入った煽動者は議場の通路を實力で占領し、階上の廊下のはとんど総てに一杯に入っている。

議員トイネル *Assemlyman Theuner* は、警察の保護措置の増大を求めたといわれている。市公会堂前の群衆の発する大声の抗議や脅迫の只中で、ズール議長は通路から煽動者たちが引揚げるまでは開会しないと述べた。建物の前には益々多くの人たちが集まって来た。彼らは赤旗や大きなスローガンを掲げている。ラウドスピーカーを載せたトラックはオート・グロテヴォールやウォルター・ウルブリヒトの演説を放送している。

だが、警察の増強勢力は全然到着しなかった。市公会堂はソヴィエト管区の中に位置していた。そして警察が故意に動かないことは、彼らが煽動者と連携していることを明らかにした。終には議場に秩序が回復されたけれども、それは社会主義統一党の議員が煽動者たちに引揚げるよう合図をしてから漸くのことであった。^{*}

* 次の議会で非共産主義の議員たちがした此時の混乱についての説明によると、共産主義者の官吏が此の群衆を指揮していたことが明らかになった（一九四八年六月廿九日附ベルリン市議会第七拾五議会議速記録の「一」参照）。タス通信もまた、此の事の間接的な方法で明らかにした。「煽動者たちが市公会堂を立去ったのは、（共産主義者の組織する組合である）大ベルリン自由ドイツ労働組合執行委員長ローマン・チヴァレック *Roman Chwalek* が、市議会が決議したことについては、何であろうと直ちに示威運動の本部に知らせることを約束した後におこつてゐた。……」(*Soviet News* June 24, 1948.)

観察者たちはまた、事態を手中におさめるべく努力している市長代理ルイズ・シュレーダーの冷静な行動を信頼し

たのであった。

二時間遅れて此の議会は開会された。この非常に重大な任務を負わされた雰囲気の中で、市政府執行部（マギストラート）のスポークスマンは、ソコロフスキー元帥の命令百拾号はソヴィエト管区にのみ適用されること、他の地域は西側諸国の命令に従うことという結論を明らかにした。二種類の貨幣が相並んで通用するという事実はいくつかの問題を起し人々を困らせるかも知れない。だが、此等の問題は克服され得るであろう。さらに彼は次の様に述べた。^②
「市評議員クリンゲルヘーファが述べている如く、二種の貨幣は相互に競合し、どちらが強いかを自ら証明するであろう。」

社会主義統一党の擁護者たちは、西側の此の反対措置および此の措置を賞讃した市政府執行部（マギストラート）の決定に烈しく反駁した。彼らのうちの一人は、市政府執行部の多数派はニューヨークおよびロンドンからの命令に従い、ベルリンを西側諸国の植民地主義の外郭地たらしめんとしていると非難した。

彼はまた、預金を引き出せず西ベルリンに居住している人々たちを脅迫して次の如く述べた。

「ベルリン人民の預金勘定および社会保険基金はベルリンのソヴィエト管区内にある。われわれはベルリン人民の此等の基金を独占主義的な西側諸国の利益のために犠牲にすることに決して同意しないであろう」^③

市公会堂の外に敵対的な群衆が集り、社会主義統一党（SED）が議場において脅迫したにもかかわらず、市議会の民主主義的議員たちは、市政府執行部（マギストラート）を確固として支持する投票をした。だが彼らは勇敢な決定から生ずる結果を甘受せねばならなかった。彼らが市公会堂から出て来た時に、共産主義者の暴徒が彼らを待ち受けていた。そして多くの議員たちが襲撃された。社会民主党の議員ジャネット・ヴォルフは特に烈しく殴られた。彼

女は以前にナチスによって強制収容所に投獄されていた事があるので、此の事は多くのベルリン人に相似した事態の想像を強からしめたことは明らかであった。

共産主義警察は介入することを再び拒否した。警官の中には特定の個人を指摘して、「ごろつき的行為」^{そのか}を唆すものがいた。「犯罪人ノイマンの車はあれだ」というのを聞いたものがある。これは多分、ベルリン社会民主党の委員長のことを言ったのであらうと思われる。其の晩遅く数人の議員を護衛して其の建物から無事逃れさせた東管区の一警官は、次の日ソヴィエト軍政府命令によって解任された*。

* 此の報道はベルリンにおけるソヴィエトおよび共産主義者の侵略的な行為に抗議するための覚書（タイプ印刷）の中にある。此の覚書は一九四八年九月九日に政府並びに党の役員たちから成る一団体から連合国管理理事会における西側当局者に手渡されたものである。

これらの事件についての多少違った記事が共産主義系の新聞に現れた。「ノイエス・ドイチュラント」によれば、示威運動に参加した人たちは百に近い産業や大衆組織を代表する民主主義的労働者や代表者たちであって、ベルリンが唯一の交換手段として東地域の貨幣を採用することを議会に請願するために集まったものであった。

此の記事を目立たせる為の見出しには数行に亘って次の如く書かれていた。「ベルリンを分裂させようとしている人たちに対する烈しい怒をこめて労働者たちは断固要求する。東側の貨幣のみが全ベルリンに適用せられるべきである。市執行部の多数派はあらゆる理由を無視して二重貨幣制と関税障壁をベルリンに布こうとしているが、これは混乱と飢餓と失業を生ぜしめるものである」。ソヴィエト軍の出版物である「毎日評論」[Tägliche Rundschau] は、非共産主義議員たちは群衆に訴える勇氣に欠けている。そのため労働者たちは我慢することが出来ず、労働階級の裏切

者に対する行動を開始したのだと述べた。

此の示威運動の姿をさらに明らかならしめる事件が二日後に起った。伝えられるところによると、西側の貨幣に反対する統一決議案を採択した東管区の店舗組合の一つから派遣された多勢の労働者たちがズール博士 Dr. Suhl を訪問した。これらの労働者たちはズール博士に対して、此の決議文は店で働く数人の社会主義統一党員によって「総ての労働者の名に於て」実際に作成せられ且公表せられたものであると語った。だが、大多数の人々は非共産主義系の独立労働組合の支持者であつて、少数の共産主義者たちの公認されない行動に抗議するための会合を持つてゐた。此の会合はソヴィエト占領軍当局によって禁止された。そして此の会合を計画した人たちは、もしも彼らが共産主義者を非難することを続けるならば、暑い昼の食事を得られなくなるであろうという脅迫を受けた。²⁴

六月廿三日の夜、総ての市議會議員がようやくのことです公會堂から逃れ出た後、社会民主党執行委員会の会合が開かれたが、それは西独社会民主党副委員長・エーリッヒ・オレンハウアーにベルリン状態を知つて貰うためであつた。オレンハウアーは、まさに此の危機的な時に到着した。そして次の日の事件の目撃者となつたのである。

六月廿四日（木曜日）——完全封鎖——

木曜日の朝ベルリン人たちは西独とベルリンとの間の貨物輸送が停止されたこと、そして西側諸地区は通常東ベルリンおよびソヴィエト地域から此の町に入つて来ていた電流の大部分を差止められてしまつた事を知つた。此の報道は東独ニュース提供公社(ADN)によつて其の朝配給された二つの短い事実項目の中に含まれてゐた。だがそれは共産主義新聞に特種としてはっきりとは報道されなかつたし、公式のソヴィエト発表の題材にもなつてゐなかつた。次

の毎日評論 *Tagliche Rundschau* の裏側の頁に発表された一項目は、電流の差止めについて次のように述べていた。
ベルリン、六月廿四日発、(ADN)

木曜日以来、ベルリン西側諸地区は極度の電流不足に見舞われている。原因は此の町に電流を供給しているゴルパ・ Cholneヴィチ水力発電所 *Golpa-Tschornewitz power plant* の技術上の困難にある。BEWAG（ベルリン電気会社）はソヴィエト当局から西側諸地区への電流の配給を制限するよう指示を受けている。電流の差止めは一日中続く。午後十一時から午前一時の間だけ供給されるものと思われる。西側諸地区における電流不足は直ちに下水処理機関のうち十九本の送水管が其の活動を停止したことを意味する。西側諸地区における水の供給にも色々な地域で差障りが生じて来ている。

別の記事——これも亦ソヴィエト側の新聞の目立たない所に載っていたものであるが——は、食糧供給の問題について次の如く述べている。

ベルリン、六月廿四日 (ADN)

其の筋からの情報によれば、既に発表されているベルリン・ヘルムシュテット鉄道の技術的困難は、当初考えられていたよりも遥かにひどいようである。

それ故、此の線上においていずれの方向に行くのも禁止されている旅客並びに貨物の輸送が、何時復旧するかを今言うことは難しい。ベルリンの西側三地区の食糧は此の線を利用する託送に依存しているので、此等三地区への食糧補給については、大きな懸念がある。

最大の困難が予想されるのはフランス地区である。何故なら、此の地区には馬鈴薯、動物性脂肪および穀類の貯

蓄が全然されていないからである。

ソヴィエト側はさらに、東ドイツからベルリンに運び込まれる総ての食糧は東地区のみに配給されるであろうと発表した。新鮮な野菜やミルクは、従来ソヴィエト軍政府との特別協定により西ベルリンの赤ん坊に供給されていたのだが、此の発表は主として其の新鮮な野菜やミルクに適用されたのであった。医薬品の供給もまた中断され、すべての銀行預金は、ベルリン全市の中央銀行でありソヴィエト地区にあるベルリン市勘定事務局 Stadtkontor に封鎖された。^{②⑤}引続いて西ベルリンへの水の供給も難しくなるだろうという報道が、それによって予想される状況と共に、ソヴィエトが管理するラヂオ放送を通じて入って来た。ベルリンの家庭の主婦たちは総ての利用し得る入物に水を入れておくために殺到したので、水道は殆んどこわれてしまった。だが、アメリカ合衆国管区のラヂオは人々に希望するだけの水を全部使用するようすすめ、水は充分にある旨を説明した。此の結果、水騒動は静まり、水への欲求は次第に通常に復帰したのである。^{②⑥}

ほかにも恐しい噂が町中を走り廻っていた。西側諸国はベルリンを離れる計画をしているとか、汚物下水問題について伝染病が発生するだろうとか、ソヴィエト軍が市外で演習しているとか言う類のものであった。人々に安心させるために、ハウリー大佐は一つの布告を出し其れは直ちに放送された。それは主として通貨改革についてのものであり、新しく発行される西側マルクを信頼するよう求めたものであったが、また其れは風聞に対して警告を差し、人々に三十日分の食糧が用意されており彼らが飢餓に瀕することはない旨を保証したものであった。西側当局は供給を中断された生ミルクに代って沢山の粉末全乳が準備されていることを発表し、小さな赤ん坊に粉末ミルクを与えるにはどうしたら良いかについて指示する放送がベルリンの母親たちに向けて行われた。ハイデルベルク街のアメリカ合衆

国陸軍司令部を訪問中であったクレイ將軍は、ロシア人がアメリカ合衆国にベルリンを放棄させる唯一の方法は戦争以外にはないということを新聞記者に語った。フランス外務省はフランスはベルリンに止まるであろうという声明書を発した。そして、英国地区司令官ハーバート將軍は、緊急事態に対処する為の措置が講じられていると人々に語った。同時に西側諸国は利用し得る資源を節約して使おうとした。彼らは直ちに西ベルリン内に現実には位置しているすべての貯蓄食糧を、中にはソヴィエトが使用するものと定められていたものもあったが、すべて凍結してしまつた。此等のソヴィエト用の備蓄は封鎖が終るまで「借用する」と考えられた。⁷⁷

それに加えて英国当局は、ソヴィエト地域への石炭および鋼鉄の輸送を直ちに差止めた。それまでソヴィエト地域はルール地方から毎月百万トンの石炭と三万トンの鋼鉄を受け取っていたのである。此の措置は報復措置としてとられたのではなく、ソヴィエト側が従来からの輸送に使用されていた一万六千輛の貨車の返還を拒絶したという事実から生ぜざるを得なかつたことであつた。⁷⁸

次の日、英米二国經濟委員会は、ソヴィエト地区との交易にさらに制限を加える旨発表した。⁷⁹

これらの断固たる声明および對抗措置が行われたにもかかわらず、連合軍陣営に信頼感が最高に漲る徴候はみられなかつた。フランクフルトからニューヨークタイムズへの電報は、戦争以外の方法ではアメリカ合衆国をベルリンから追出すことは出来ないというクレイ將軍の声明があつたにもかかわらず、もしもベルリン人民の苦しみが余りにも大きくなれば、西側同盟諸国はベルリンを去るかも知れないという印象を報じた。其の電文はさらに「ロシア人がなおも輸送制限を続けるならば毎日二千トンの供給を必要とする此の都市に空輸によって食糧を補給することは不可能となるであろう。そうなつた場合、西側同盟国がベルリンを去るといふ決定をしても、それはドイツ人の利益のため

の外交上の犠牲として説明出来るであろう」と述べた。^⑤

だが、木曜日の午後に行われた大衆の会合によって判明したことは、ベルリンの民主主義的指導者たちは、彼らの利益のためになされる斯様な外交上の犠牲をまったく歓迎しないということであった。「ターゲスシュピーゲル」の木曜日の朝刊は、政治状況がこのような沸騰点に達する数日前に、実際には社会民主党（SPD）によって計画された此の大衆会合について、次のような記事を載せた。

ベルリンの男・ベルリンの女たち

過去数ヶ月間に貴方たちは自由のための示威運動を——三月十八日と五月一日の——二度行^{きた}った。世界は貴方たちの叫びを二度聞き、それを理解している。社会民主党は今日の午後五時三十分から大衆会合を開くことにした……これは第三回目の大衆会合であり自由を求めるさらに大きな叫びである。一方的なロシアの行動によって生ぜしめられた状態についてエルンスト・ロイターが演説する……共産主義者は経済的圧迫を加えることによってベルリンを其の権力下に収めようとしている。ベルリン人は、社会民主党に所属しようがしまいが、此の会合に参加することによって、彼らはいかなる専断的な政治行動に対しても屈するものではないということを示すことが出来るのだ。会合が行われた競技場には約八万人のベルリン人が押し寄せた。^⑥

市長代理ルーズ・シュレーダーおよび婦人議員ジャネット・ヴォルフが現れると、嵐のような拍手で迎えられた。ベルリン社会民主党委員長フランツ・ノイマンが開会を宣した。「かつてないほど世界の眼はベルリンに注がれている。昨日共産主義者のグロテヴォールとピエック Peck は、ヒットラーを模範としてプラーグの例に倣って、脅迫によってベルリンの権力を掌握しようとした（彼の此の言葉は明らかに市公会堂の暴動について語っているのである）。

だが彼らは誤算した。……ベルリンはいぜんとして自由であろう。ベルリンは決して共産主義化されない」。

此の会合の本演説でエルンスト・ロイターは再び共産主義者を非難する言葉をはいた。ドイツ民主主義の心臓はベルリンで脈打っていると彼は述べた。今日以後、ベルリンが再びドイツの真の首府であることを疑うものは誰もいないであろう。市議会の論議は全ドイツに於て聴かれているのみならず、全世界に聴かれている。ロシア帝国主義の蔭にかくれて共産主義者たちはベルリンでクーデターを敢行しようとしている。だが吾々は沢山である——吾々は監獄と強制収容所を伴う新しい独裁制度を希望しない。通貨改革の口実の下にクーデターが試みられ、ロシア地域で使用される詭弁でベルリンでのそれが正当化されている。市公会堂前の暴力で達成し得なかった事を達成するために、共産主義者たちは飢餓の鞭と経済封鎖の妖怪の力を使用しようとしているのである。「統一」のスローガンの下に社会主義統一党（SED）は、背後に控える権力と結合して、征服のための戦争をしかけている。だが残酷な力による方は必然的に此れに対応する暴力を呼び起すものである。自由は何人にも与えられるものではない。フィンランドが自由を維持したのは、自由を維持せんとする決意を持っていたためである。そしてベルリン人の自由のための戦は、勝利の栄冠を与えられるであろう。

西独社会民主党副委員長エーリッヒ・オレンハウアーもまた、此の会合で演説した。彼はベルリン人たちが確固とした立場をとっていることを賞讃したが、自由たらしとする意志だけでは戦に克つことは出来ないことを指摘し、西側諸国がベルリンに援助を与えるよう要請した。

フランツ・ノイマンが閉会演説をした。「われわれは市議会並に市政府執行部がベルリンの自由と独立を維持するために、其の意の儘に凡ゆる手段を用いることを約束する。もしもマルクグラーフの警察 *Markgraf's police* が昨日

におけると同じように未来においても消極的であるならば、われわれは貴方がたが選んだ代表を貴方がた自身でまもるよう貴方がたに求めるであらう。もしも連合国にそれが出来ないならば、吾々が秩序を維持しなければならぬ」と彼は述べたのである。彼はまた、ベルリン人にとって現在の脅威はベルリン人だけで対処するにはあまり大きくなりすぎてしまったと述べ、西側諸国およびあらゆる場所の自由人たちがベルリンへの援助に参加するよう呼掛けた。テレグラフ紙 The Telegraph は「ベルリンは世界に訴える」という見出しのもとに、此の会合について報道した。本当にベルリンの指導者たちの言葉は、彼らの前にいる聴衆に対してのみならず、ベルリン以外の場所にいる人たちにも訴えているように思われた。

通貨改革、封鎖措置および大衆の会合は、其の日の主要なニュースになったけれども、同じ木曜日に起った二つの比較的小さな事件は、かねて計画されていたソヴィエトの動きに関係があったように思われる。まず、独立労働組合の指導者たちは、共産主義者の指導する労働組合がストライキを計画しているのを予知し、労働者たちに労働をやめることは共産主義者の政治目的に奉仕するだけであるから、そういうことはしないようにと呼掛けた。^③

第二に、ソヴィエト地区のベルリンへの空廊の一つの内側または近辺に阻塞気球があがっているのが見られたことである。英国空軍は自国の飛行士に五〇〇フィートの高度を飛ぶよう命じた後で、ソヴィエト側に抗議を申込んだ。すると、ソヴィエトは気球の高度を下げた。^④

此の気球が現れたことは、明らかにいくつかの噂を生じさせる原因となった。アメリカのニュース供給機関によって取り上げられた噂の一つによると、気球網があげられたのはテンペルホーフ飛行場への着陸を妨害するためであった。西ベルリンの一新聞編集員が後に報じたところによると、此の報道が受信された時、彼は暗い気持ちに襲われたと

いうことである。市政府執行部並に市議会の決定は、ソヴィエトは戦争を欲していないという仮定にもとづいて為されたものであった。だが、西側占領軍関係の人々の生命線に干渉しようとする阻塞気球の打揚げは、ソヴィエトが虚勢を張っているのではないことを示す傾向のあるものだった。

*空輸によつて、一般市民 *civilian population* にまで物資を供給するという決定がなされたのは翌日のことであつた。

一時間後、受信機が一つの報道の訂正を受けた。それによると、テンペルホーフより東には気球網は見られないということであつた。其の編集者は安堵のため息をついた。だが、用紙をかたづけ、家に帰る途中、廿五日の暁に、テンプルホーフ飛行場の側を自動車で通過した彼は、首をのびして空をずっと眺めた。

六月廿五日（金曜日）——空輸の開始決定——

金曜日の朝、ベルリンの新聞はソコロフスキー元帥からベルリンの市民へ宛てた言葉を載せたが、其の言葉の中で此のソヴィエトの司令官は、西側諸国が連合国管理理事会におけるソヴィエトの合理的な提案をすすんで拒絶したこと、および、不法にも西側のマルクをベルリンへ導入することによってベルリンの経済生活を破壊しようとしていること、そしてドイツを分裂させようとしていることを理由として、西側諸国を非難した。彼は一般市民に対するソヴィエトの封鎖に直接言及しなかつたけれども、四国によるドイツ統治は終了したものと彼が考えていること、そしてソヴィエト軍政府は全ベルリンについての責任を負う用意がある旨を明らかにした。さらに彼は次のように述べた。

「挑発者たちはベルリン人に西側地域の新銀行券を無理に受諾させようとしている。特に、彼らはベルリン人に対して、ベルリン人に対する補給は西側占領軍当局がいなければ不可能であるということを告げている。此の様な見

解の妥当性はきわめて疑わしいものである。それとは反対に、アメリカ、イギリス、フランスの占領軍が入って来る以前においてさえ、ベルリンへのあらゆる生活必需品の補給は順調に進行していた」。

同日の東ドイツニュース提供公社（ADN）の電報は、英国がベルリンからの撤退を考えている旨を報道した。軍政副長官ブラウンジョン Brownjohn の報告を聞いたアトリー政府は、英国はベルリン占領に関してソ連との妥協に到達するか、または、完全にベルリンから撤退するかのいずれかに決めなければならないだろうという決心をしたということが報道された。ベルリンにおける西側の政策は英国およびアメリカ合衆国内で反対に遭っているということ共産主義系の新聞が報道した。サンフランシスコ・クロニクルは、ドイツにおけるクレイ將軍の政策を積極的に非難し、一方、ロンドンの色々な新聞は、ベルリンへの西側マルクの導入に反対していると伝えられた。

此の点でもしも西側諸国が不決断の様子を示したならば、ソヴェートの計画は成功したかも知れない。本当に六月廿五日と廿六日は西側諸国にとって重大な日であった。主要な諸決定がなされた方法についてのもっと詳しい説明は別の機会にこれを発表するつもりである。

だが、意義深いことは、英国の航空機がベルリン駐在の英国守備隊に対して、六月廿五日に六トン半の物資補給をしたことであつた。^{③④}

英国の役人が後に明らかにしたところに依ると、当日英国は空輸によってベルリンの一般市民に物資を補給する問題を検討していたのであつた。

アメリカ合衆国にとつては、当日の決定はクレイ將軍の手にまかされていた。そして六月廿五日が西側にとつて暗黒の金曜日にならなかつたのは、クレイ將軍が迅速且賢明に行動したお蔭に大いによるのである。廿四日の夕方、ハ

イデルベルクの陸軍司令部から帰って来たクレイ將軍は、彼の参謀たちの意見が分裂しているのを知った。一派の参謀たちはソヴィエトは虚勢を張っていると考え、または実力で後退させ得ると考えていた。他派の参謀たちは、アメリカ合衆国にとっての唯一の分別ある政策は、撤退計画を作成することであると考えていた。どちらに行動すべきかの勧告は得られなかった。クレイは決定しなければならなかった。

ベルリンを放棄することは、アメリカ合衆国に政治的な破壊作用を及ぼすであろうという意見を、以前に陸軍省に表明したところのあるクレイ將軍は、其の確信を基礎として其の方針を進めて行った。だが彼は、甚しい市民の混乱を眼前にしながらベルリンに止ることは不可能であろうと知っていた。それ故、全面的な封鎖がなされても、何とかしてベルリン人への補給はなされなければならないと彼は考えた。

西側地区のために少くも部分的に、そして一時的に空輸をすることが可能であるということは、既にクレイ將軍の胸に浮んでいた。^{*}

^{*}空輸をはじめようという考えは多くの地域で別々に考えられていたらしい。前首相アトリーが後に述べたところによると、空輸の開始は最初一英国空軍士官によって提案された。そして其の後アメリカ合衆国によって採用されたのである。（Cf. *The Times*, London, April 15, 1956.）フィリップス・デーヴィスン博士は、此の考案を、いずれかの国のいずれかの個人または団体を全面的に信頼してそのせいに帰してしまおうとすることは、無益なことであろうと述べている。

ベルリンの連合国占領軍関係の人たちに空輸補給することが可能であるということは分っていた。そして、ウィーヌバーデンの空軍司令部はベルリンへの貨物空輸の回数を増加しようという計画のもとに仕事をはじめていた。だが、二つのきわめて重要な問題が残っていた。全力を尽してようやくベルリン人の手にとどくようなごく制限された供給物資の点から考えてベルリン人はそれに耐え得るであろうかということが一つ、大規模に空輸を拡大することが

技術的に可能であろうかということが一つであった。

第一の疑問に答えを得ようとして、クレイ將軍はエルンスト・ロイターを彼の事務所に呼んだ。彼は此の練達の社会民主主義者に、空輸によってベルリンに補給しようという考えを告げたが、同時に其の補給は最小限の補給であつて、もしも封鎖が冬までつづくならばベルリン人民は非常な窮乏に陥るであろうという事を強調した。彼はまた、ベルリン人が連合国の後押しをしてくれるのでなければ、空輸は成功しないという事を指摘した。ロイターは、躊躇せず、ベルリン人は民主主義的自由のために闘う用意があり、ソヴィエトの要求に屈服しないであろうという返答をした。だが、彼はソヴィエトは虚勢を張っているであり、戦争を欲してはおらず、もしも連合国が武装した柱を樹立して公道をヘルムシュテットから空高く上げてしまえば、封鎖を解除するであろうと信じていた。

次にクレイ將軍はベルリンへの空輸規模拡大の可能性について検査した。そしてヴィースバーデンのアメリカ合衆国空軍司令部のカーチス・ルメー將軍に電話した。^{*}

*クレイ將軍自身は彼がルメー將軍を呼んだ日を廿四日であると言っている。他の資料によれば、其の日は廿五日だとされる。あり得べき斯様な一日の喰違が重要な事件の理解に実質的な影響を与えるとは考えない、とデーヴィスン博士は述べている。

クレイの参謀たちの一員は此の時の電話による会話の部分の部分を次のようであつたと述べている。

「カート」とクレイ將軍は言った。「君は飛行機で石炭を運ぶことが出来るか」。

電話の向側に驚いたような沈黙が感じられた。それから、ルメー將軍は次のように答えた。「將軍、済まないが今の質問をもう一度言ってくれませんか」。

此の会話の結果として、ルメー將軍は彼の指揮下にある利用し得る総ての飛行機を動員したが、それらの中にはヴ

イスバーデンの飛行士養成所で使われていたものや、何台かの古いB17爆撃機も含まれていた。こうして次の日からベルリンへ空中補給をする準備がなされた。これら多くの飛行機には其の為に訓練されている乗組員がいなかったので、机上の事務や其の他の型の仕事をしている人たちから、パイロットが選ばれた。^⑤

在ヨーロッパの米軍の輸送能力は、当時は、僅かに三トンの輸送能力しか持たないC47型飛行機に大部分頼る以外にはない状態であった。そしてクレイ將軍もルマー將軍も共に、適当な空輸のためにはもっと大きな飛行機が必要であるということに気がついていた。もしもベルリンに毎日C47型飛行機で約四百回の空輸が可能であることが確実に判明するならば、十トンの輸送能力を有するC54型飛行機をこれに代えれば、可能の範囲内で最小限の物資補給を此の都市にすることは、大丈夫考えられるように思われた。だが、こういう事をする事の現実的可能性については、まだ多くの疑問があった。クレイは最初、「非常に大きな作業」^⑥たるべき此の輸送においては、一日について五〇〇トンから七〇〇トンが最大限であろうと考えた。

クレイ將軍はワシントンからはっきりした激励を受けなかった。本当に、彼は確固とした立場を維持して行くよう陸軍省や国務省に勧告せねばならなかった。廿五日の午後かまたは夕方に行われたテレタイプによる相談で陸軍省はもしも西側通貨をベルリンへ導入することが武力衝突を生じさせるかも知れないならば、それを延期した方がよいと述べた。クレイ將軍は、それには時期が遅過ぎると断言した（新貨幣と旧貨幣の交換は其の朝始まってしまったのである）。さらに將軍は、アメリカの態度が軟化する兆候が少しでも見えるならば、ベルリン人の信頼を破壊する恐れがあることを指摘した。彼はさらに説明をつづけて、ベルリンにおける西側の立場にとつての主要な危険は、共産主義者がベルリン人たちの間に指喚する恐慌であると述べた。「我々は武力衝突が起るものとは思ってはいない。

……主要な危険はロシアの指導するドイツ共産主義団体の脅威である……」。ソヴェィエト軍政府の目的は明らかに、ベルリン人たちが旧貨幣を西側の導入するマルクと交換しようとはしない気持になるまで彼らを脅迫することにある。のであるが、クレイはベルリン人たちは西側諸国を支持するであろうという信念を表明した。彼は次の様に述べた。

社会主義統一党の指導者を除いては、どのドイツ人の指導者も、また、数千人のドイツ人たちも共産主義に対する反対を勇敢にも表明している。われわれはベルリンを離れるという徴候を示すことによって、彼らの信頼を破壊してはならない。……かりにソヴェィエトが戦争を欲するとするならば、それはベルリンの通貨問題のためではなくて彼らが此の時期を戦争に適当な時期だと考えるが故である。⁵⁾

クレイ將軍はまた、アメリカの軍人たちの家族たちが撤退すべきものとは考えないと述べた。

一方、ベルリン市政府は積極的に其の役割を果していた。一連の討議の後、ドイツの役人たちは、注意深い配給をして行けば、生活必需品の補給は暫時維持出来るであろう。そして其の間あらゆる努力をばらってベルリンの窮状を訴えて行こうと決心した。この後の方の目的を達成するために、彼らはあらゆる可能な方法をつかって世界の新聞の関心を集めるべく努力することに意見の一致を見た。そして市政府執行部に委員会をつくり、国際連合への誓願書を起草させることにした。^{*}

^{*}此の誓願は遂に国際連合に到達することがなかった。この事はベルリン問題を此の国際機関に公式に提出する加盟国を見出すことが困難であったことが部分的原因になっている。(Cf. Berliner Schicksal, 1945-1952, a collection of official documents published by the government of Berlin, 1952, pp. 56-59.)だが此の誓願は有効な目的に役立った。何故ならばそれは戦争に至らないでソヴェィエトの封鎖を打破する方法が殆んど無いと思われた時に此の町の指導者たちに希望の光を与えたからである。国際連合への此の誓願が失敗した事が明らかになった時までには、空輸は既に人々の心を動かす程度に迄達していたのである。

市政府における社会主義統一党の代表者たちは、ベルリン市政府よりの誓願書を受取るのは国際連合よりもむしろ四占領国であるべきだと主張していたけれども、それにもかかわらず民主主義的な同僚たちと比較的なごやかに協力したということはまさに驚くべきことであつた。ドイツの指導者たちは又、四国軍政府のすべてに圧力を加えて、西側のマルクも東側のマルクも共に全市に通用することが許されるようにしようと決心した。

ワシントンにおいては逡巡の様子がさらに目立った。閣僚会議 a Cabinet meeting に引続いてトルーマン大統領は、国防長官フォレストアル、陸軍長官ロワイヨール Royall および國務次官ラヴィットとも会い、ベルリン状勢を討議した。フォレストアルが日記に書いている所によると、此の時の討議は主としてベルリンにおけるアメリカ合衆国の法律上の権利並びに約束について色々と繰返された。ラヴィットかまたはロワイヨールが述べているところによるとスターリンはアメリカ合衆国がベルリン地域へ人または補給物資を導入する権利を持つ事に原則として同意した。だが此の同意の条件について書類に書き残されたものは全くなかった。フォレストアル日記の編纂者は、ソヴィエトのベルリンに対する圧迫が増大して三ヶ月たつても未だアメリカ合衆国の立場が非常に漠然としていたということは、どちらかというところと驚くべきことだということを、柔かな調子で述べている。^⑧

六月廿六日（土曜日）——ソヴィエト宣伝攻勢——

東ベルリンにおいて土曜日の朝の大きな報道は、ワルソー八ヶ国会議のコミュニケであつた。ノイエス・ドイチェラント第一頁トップの見出しには、「ロンドンの「掠奪」に反対するドイツの為の提案——非武装、平和条約、一つのドイツ政府、占領軍の撤退、ルールの上の四ヶ国管理」とあつた。別の記事は、英国軍政府がベルリンを封鎖しソヴィエ

ト地域と英国地域の間、の運輸をとめたこと、ベルリン電気会社はあと十日間分の石炭しか持ち合せていな事と、西ベルリンの産業は停止の危機に頻していること、西側地区には僅か三十日分の食糧しか残っていないことなどを詳しく報道した。共産主義新聞はまた、ソヴィエトはベルリンが飢饉に頻するのを許さないであろうということ、⁹⁸「ベルリンは「東側マルク」を支持するに決した」ことを報じた。ソヴィエトの管理するラヂオ放送局は此等の事項を繰返して放送した。社会主義統一党の委員長補佐 co-chairman ヴィルヘルム・ピエック Wilhelm Pieck は新聞記者との会見で、ベルリンの危機は西側諸国がベルリンを離れることによってのみ解決されるであろうと述べた。⁹⁹

共産主義者が宣伝用具として使用したのは、新聞とラヂオのみではなかった。ターゲスシュピーゲルは、社会主義統一党が西側地区へ所謂「突撃演説隊」および「煽動自動車」を派遣していることを報道した。演説隊は人通りの多い街角を選び、大声で人々に呼び掛けた。人のかたまりが出来る直ぐに彼らは、西側軍政府を攻撃し共産主義新聞の論説を引用した。「煽動自動車」には共産主義自由ドイツ青年団の役員や団員が一杯に乗っており、彼らは自動車を乗廻して歩道の人たちにリーフレットを配ったり、或は車上からばらまいた。

一方、社会民主党の指導者たちはベルリン人たちに自信を持たせ、彼らを蠶棧敷におかないよう計画を立てた。彼らは西ベルリンの凡ゆる街区の民主主義諸政党の機関と協力して集会を開き、区長や其の他の政治指導者を演説者たらしめようと決意した。社会民主党の指導者たちは又、共産主義の労働組合がゼネスト突入を呼び掛け、かくすることによって市議会への不信の念を起し、殊によると、ソヴィエトに「秩序を回復するための」武力介入の口実を与えるのではないかということを恐れた。諸工場の社会民主党団体に対して、斯様なストライキの試みに対して警戒し、それらを蓄のうちに摘み取ってしまうよう通達が行われた。^{*}

*翌日（六月廿七日）の「テレグラフ」には、指導的な共産主義役人に発せられた社会主義統一党の命令が掲載されたが、それはゼネストの準備をするよう述べたものであった。

土曜日に英国から到着したニュースで、ベルリン人たちは激励された。「英国はベルリンを去ろうとしている」という共産主義者の声明に刺戟された英国外務省は次の如く声明した。

「ベルリンにおける最近の事件に関する英国政府の態度を予測推定せんとするテークリッヘ・ルントシャウの報道に注意を喚起する。此の報道は完全な虚偽であり、絶対に英国政府の真の態度を示すものではない。われわれがベルリンにとどまろうという意志を持っている旨の声明は依然として有効である。

頼る所のない一般市民に飢餓の思いをさせてベルリンに逃げ場のない圧迫状態をつくり出し、他の同盟国の犠牲において政治的利益を得ようとするソ連政府の残酷な意図に対しては、全世界の与論がこれを非難するであろう」^④

ルートンのベドフォルトシャイアにおいて開かれた党大会において保守党は、ベルリン危機についての労働党政府の態度を支持する旨公約した。「ロシア共産主義政府が吾々、フランスおよび他のすべての同盟国を追出し、ドイツにおけるロシア地域を衛星国の一つにしてしまおうと決心しているのだということは明々白々である……」とウィンストン・チャーチルは述べた。^④

土曜日にアメリカ合衆国空軍は八〇トンの補給物資を西独の基地からベルリンへ運んだ。ルメー將軍はヨーロッパにあるアメリカ軍用機で、利用し得るものをすべて掻き集めることを猶も続けていた。また彼は、もっと飛行機を送るようワシントンに電報を打った。^④

其の後の新聞報道によれば、此の電報が受け取られてから二時間以内に追加飛行機が徴集されてドイツに向けられ

た。トルーマン大統領は在ヨーロッパ軍司令部の利用に供し得るすべての飛行機を此の空輸に参加させるよう命令した。⁴³

それでも未だ、トルーマン大統領および権威筋一般は此の空輸をば、現存する食糧配給量を増大し外交交渉のため時をかせぐ手段であると考えていた。⁴⁴

此の空輸でベルリンへの補給が、非常に長く続くと信ずるものは殆んどいなかった。ドルー・ミドルトンがベルリンから「ニューヨーク・タイムズ」に打った電報によれば、西ベルリンは現在貯蔵されているものに空輸で運び込まれるものを加えて、三十日間は食べて行けるであろうというのが「公式の見解」であった。「七月の末にかけて情勢は全く重大なものになるだろう」というアメリカ合衆国軍政府の上級官吏の予言的な言葉を彼は引用している。ハーバート・L・マッシュューズも、ロンドンから同じような予測を打電して来ている。「ベルリンを食ばさせて行くことは、そう長くなければ可能であろう云々」。後になって、ハウリー大佐の書いているところによれば、「九十二万のドイツ人家族に飛行機で補給することがどうやったら可能であるか、私には全く見当がついていなかった」⁴⁵

六月廿七日（日曜日）―ワシントンに於ける審議―

共産主義者の煽動は続いた。ノイエス・ドイチュラントは小さな見出しで「『アメリカ人』は去ろうとしている」と書いた。^{*}

* “Amis” は第二次世界戦争中にドイツ軍が使った “Amerikaner” のニックネームである。“The Amis are leaving”.

テークリッヘ・ルントシャウは、ワシントンにおいては國務省も国防省もアメリカ占領軍がどの位の期間ベルリン

に滞在するのにかについてはっきり言明することを躊躇していると報じた。此の報道は、事実そう見当違いのものではなかった。日曜日の午後、陸軍長官ロワイヨール Royall の事務所で、ベルリン情勢を討議するための緊急会議が開かれた。出席者は国防長官フォレストル、國務次官ラヴィット、海軍長官サリヴァン Navy Secretary Sullivan、陸軍參謀長ブラドレー將軍、および空軍からノースタッド將軍であった。討議は現在の保存食糧に空輸による補給を加えれば、大体三十日はもつだろうという仮定および乾燥食品を入れれば六十日間ベルリン人を食べさせて行くことが出来るかも知れないという仮定にもとづいて行われた。三つの可能な行動様式が討議された。それは、或る適当な時期にベルリンから撤退することを今定めること、あらゆる可能な手段をもちいてベルリンにおける米国の立場を擁護することを定めること、或は、最終的な決定は延期しつつベルリンにおける確固たる立場を維持することの三つであった。⁴⁶

ベルリン駐在を擁護する立場から行われた議論の中には、撤退は全ヨーロッパにおけるアメリカ合衆国の政策に影響をおよぼし、共產主義の伝播を促進するであろうというのがあった。ベルリンにとどまることに反対の意見を述べた人たちは、ベルリンに駐在することはアメリカ合衆国を何回も繰返される危険と敵意の前に曝すことになり、しかも強力でベルリンに物資の補給を強行することは戦争の危険をもたらすということを指摘した。かりにベルリン撤退が決定されたとして、其の場合ベルリンからの西欧側の撤退の影響を最小限にするための可能な方法についての討議もまた行われた。最後に、アメリカの立場を強化するためにB 29の二ヶ中隊をドイツに派遣すべきかどうか、また英国にも同じようにB 29の二ヶ集団の基地を設けることが得策であるかどうかについての問題も提起された。

此の会議で到達した結論の中には次のようなものがあつた。(1)フォレストル、ロワイヨールおよびラヴィットは翌

朝大統領と会い、大統領の権限に属する主要な問題を討議すべきこと。そして陸軍省と國務省は将来とることあるべき行動様式の夫々について短い声明文を準備し、夫々について賛否の討論をすること。(2) B 29の追加二ヶ中隊をドイツに派遣する問題についてクレイ將軍の意見を聴くべきこと。(3) 英国にB 29二ヶ集団の基地を設けることを可能ならしめるよう駐英大使ダグラスに努力を求めること。⁽⁷⁾

注

- ① Tagesspiegel, June 19, 1948. (Phillips Davison, *The Berlin Blockade*, 1958, p. 398.)
- ② Jack Bennett, "The German Currency Reform," *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 1950, p. 51. (Phillips Davison, op cit., p. 398.)
- ③ Neues Deutschland, June 19, 1948.
- ④ Neues Deutschland, June 19, 1948.
- ⑤ Tagesspiegel, June 20, 1948.
- ⑥ The New York Times, June 20, 1948.
- ⑦ Berliner Schicksal 1945-1952, a collection of official documents published by the government of Berlin, 1952, pp. 52-53.
- ⑧ Tagesspiegel, June 22, 1948.
- ⑨ Report of the U. S. Military Governor for June, 1948, p. 7.
- ⑩ Report of the U. S. Military Governor for June, 1948, p. 7.
- ⑪ Tagesspiegel, June 22, 1948.
- ⑫ The New York Times, June 22, 1948. See also Jack Bennett, op. cit., pp. 53-54.
- ⑬ The New York Times, June 25, 1948.
- ⑭ The London Times, June 24, 1948, and Report of the U. S. Military Governor for June, 1948, p. 7; See also

Jack Bennett, op. cit., pp. 51-52.

⑭ Jack Bennett, op. cit., p. 52.

⑮ Die städtischen Körperschaften in der Berliner Krise, Tatsachen und Dokumente, published by the city government, Berlin, 1949, p. 19. (Phillips Davison, op. cit., p. 399.)

⑯ Soviet News, Soviet Embassy, London, June 24, 1948.

⑰ Die städtischen Körperschaften in der Berliner Krise, p. 19.

⑱ Lucius D. Clay, Decision in Germany, New York, 1950, p. 364.

⑳ Frank Howley, Berlin Command, Putnam, New York, 1950, pp. 186-188.

㉑ Tagesspiegel, June 24, 1948.

㉒ Die städtischen Körperschaften in der Berliner Krise, pp. 19-23.

㉓ Die städtischen Körperschaften in der Berliner Krise, p. 22.

㉔ Tagesspiegel, June 26, 1948.

㉕ Howley, op. cit., pp. 196-197.

㉖ Howley, op. cit., p. 203; also Tagesspiegel, June 25, 1948.

㉗ Notes on the Blockade of Berlin, issued by the Control Commission for Germany (British Element), February 1949, p. 12.

㉘ The New York Times, June 25, 1948.

㉙ The New York Times, June 26, 1948.

㉚ The New York Times, June 25, 1948.

㉛ Cf. Tagesspiegel and Telegraf, June 25, 1948.

㉜ Report of the U. S. Military Governor for June 1948, pp. 22-23.

㉝ The New York Times, June 25, 1948.

㉞ "A Special Study of Operation 'Vittles'," Aviation Operations Magazine, April, 1949, p. 8.

- ④ Berlin Airlift—A usage Summary, Hq. U. S. Air Force, Europe, 1949, p. 3.
- ⑤ C. J. V. Murphy, “The Berlin Airlift,” *Fortune*, November, 1948, p. 90.
- ⑥ Clay, op. cit., p. 366. (Copyright 1950 by Lucius D. Clay, Reprinted by permission of Doubleday & Co., Inc.)
- ⑦ Walter Millis (ed.), *The Forrestal Diaries*, The Viking Press, New York, 1951, pp. 451-452.
- ⑧ *The New York Times*, June 27, 1948.
- ⑨ *The London Observer*, June 27, 1948.
- ⑩ *The New York Times*, June 27, 1948.
- ⑪ “A Special Study of Operation ‘Vittles,’” op. cit., p. 8.
- ⑫ Harry S. Truman, *Years of Trial and Hope*, Doubleday & Company, New York, 1946, p. 123.
- ⑬ Harry S. Truman, *Years of Trial and Hope*, Doubleday & Company, New York, 1946, p. 123.
- ⑭ Howley, op. cit., p. 204.
- ⑮ *The Forrestal Diaries*, pp. 452-453.
- ⑯ *The Forrestal Diaries*, pp. 453-454. (Phillips Davison, op. cit.) なお本稿では六月十八日から七月十五日までのベルリンの危機的狀況を叙述する筈であったが、紙面の都合で六月廿八日以降は省略した。